

それぞれ道

牧草 泉

一
秀平富彦は、手紙を開いた。弟の淳二からだった。手紙には、八月には必ず来ますと書かれていた。

「お兄ちゃんから手紙をもらってとてもうれしかった。僕は毎日元気で予備校に通っています。お母さんも元気です。親父があんななのでお母さんはパートで働いています。僕は来年大学受験なので毎日が戦争のようです。お兄ちゃんのように頭がよくないので、お兄ちゃんの二倍は勉強しています。

できたらお兄ちゃんの卒業した大学に行きたいのだけど、担任の先生の判定では難しいだろうということでした。でもあと七ヶ月あるので、この期間ありつたけの力を振り絞って勉強に励む覚悟です。

八月のお盆には必ず来ます。お姉ちゃんにも会えるということなのでうれいす。田畑の仕事も大変、たろうと思いませんが、お兄ちゃんも体をこわさないで仕事に励んでください。

妹も元気に中学校に通っています。成績は僕よりもいいので、ちよつと悔しいです。一学期の期末テストではトップになったと喜んでいました」

弟らしいさわやかな文面だった。

今年の八月にはすぐ下の妹からも八月のお盆には父の墓参りに来たいという連絡を受けていた。それなら、弟も呼んでみようと思つて手紙を出していたのだ。

二回目の田の草取りも済んだ。後は害虫の発生を注意する必要がある。彼は虫見板と拡大鏡を持つて家を出た。いつもの稲田の見回りだった。彼は大体三日おきに田んぼの見回りが出る。トビイロウンカなどが発生していないかどうかを目で確かめるためである。

彼は減農薬米生産を考えていた。これは自分から思い立つたのではない。農業従事者の自発的集まりに参加して、そこで農業指導員からヒントを得たのだった。減農薬米生産はすでに何人かが行なつていた。そんな思っているときに商社から話があつたのだった。どこで聞きつけたのか、農薬会社の社員が突然やつてきて彼に言った。

「無農薬栽培をしていただけませんか？」

まだ無農薬栽培をするとまでは決めていなかったの、彼はちよつとあわてた。

「？ どうして、私に？」

秀平が不審げに訊ねるのを制するように彼は言った。

「秀平さんの田んぼは山間地にありますね。無農薬米生産にはすごく適しているんですよ。山間地の米は美味しいんです

よ。こんなこと秀平さんがとづくにご存知だと思っただけですが……。それと谷間に田んぼがあるから近隣の田んぼの影響がほとんどないんですよ。つまり害虫が他の田んぼから侵入する度合いが少ない、当然周囲からの農薬の影響も少ないんです」

「でも収穫は少ないですよ。だから付加価値は少ない。それで儲けが出ますかね？」

「無農薬であり、美味しい米だから普通の米よりも高く売れるんです。そうすれば秀平さんも採算が合うんじゃないですか？」

秀平は感心した。訪問する前かなりの資料を手に入れてきている。

「大変詳しいようだけど、調査でもしたんですか？」

「ええ、実はうちの会社は小さな商社なんですけど、農薬も扱っているんです。ところが減農薬運動の影響をものに受けて、農薬の将来性があまり期待できなくなつたんですよ。ありていに言えば、農薬販売だけでは会社じゃやっていけない恐ろれが出てきたんです。その代替品として無農薬米で行こうということになつたんです」

「でもリスクが大きいのでは？」

「そうですね、リスクはありますね。でも仮に失敗しても、小規模ですから、損失はそれほど大きくはないとみてるんです。会社としては試行錯誤の段階なんです」

「じゃあ様子見つてところですね」

「そうですね。徐々に拡大していく予定なんですよ」

「なるほど、米の市況も見ながら、判断していくんですね」
「そのとおりです、それとうちの社長がもともと四国の農家の出で、農業に詳しいんですね。徳島県の三好市出身なんですよ、ほら、祖谷渓谷で有名な……。寒いところですよ、あそこは」

「社長さんは詳しいんですね。だから谷あいに田んぼを持っている農家を調べたんですね」

「そうですね。そのとおりです。実は社長が自分で山間部の田んぼを下調べしてるんですよ」

「じゃあ、お宅の社長さんは私の田んぼも視察済みなんですね。その社長の指示であなたはここに見えたんですね？」

「そうですね、まず農協さんに行つて相談したんですよ。すると、総務課長さんから、秀平さんのところに行つて見たら、というアドバイスを受けたんですよ」

「私のところ以外にも委託するの？ そうしないと採算が合わないでしょう？」

「そうですね。あと数軒お願いすることにしています」

「うちの近くですか？」

「ええ、この町から数軒と他に隣の町ですね。まだまだ委託したいんですが、山間地といつても意外と適地が少ないんですよ」

「それこそ付加価値が少ないですからね。ほとんどが今は畑になつていますね」

山間部の米は寒冷地のため、米粒が小さい。平野地の米粒は大きい。だから見た目は平野地の米のほうが美味しそうに

見えるが、実は美味しさは山間地の米のほうが勝っているのだ。秀平には次のような経験があるのだ。

いつだったか、大きなストアの食品販売部に行ったとき、粒の小さい米五キロ・千五百円、粒の大きい米五キロ・二千二百円の値がついていた。たまたま近くに中年の従業員がいたので、声をかけて聞いてみたのだった。するとその従業員は、にこっと笑って言った。

「お客さんの言われるとおりですよ。こちらの粒の小さい米は山間地でとれたものです。こちらは平野地産ですね。美味しいのはやはりこの粒の小さいほうですよ」

「あれっ、あなた詳しいね。じゃあどうして価格が逆になっているんですか？」

「実は、私は兼業農家出身なんです。だから知っているんです。でも大半のお客さんは見た目がいい米を買われていくんです。だからあの価格にしているんです」

「それでクレームはつかないんですね？」

「いえ、時々、問い合わせがありますね。価格の高いのが美味しくなくて、安いのが美味しいようだが、というクレームですね」

「じゃあ、気がついている人もいるんですね？」

「そうです。しかし、女性自身が気がついて問い合わせてくるってことはほとんどないですね。たいていは、ご主人が疑問をお持ちになったからという例が多いですね」

「女性の味覚は鈍感だっということかな？」

「そうですね」

と言うと彼はにやりとした。

秀平の住んでいる地方は、近辺では有名な穀倉地帯である。平野地の米もその名前が商標登録されているほどである。しかし、その平野地に住む友人が彼の家に米を買いにくるのだ。もちろん売る目的ではなく自分で消費するためのものだ。

「俺のこの行動がマスコミに知られて新聞にでも掲載されたら、平野地の米の価格は暴落するだろうな。お前は口外無用だぞ」とにやにやしながら言った。

秀平は商社員に条件をつけた。それはこういうものだった。米は籾の段階で商社に売却する。生産手段については条件をつけないこと。商社の助言は受ける。ただしその助言には強制力はないこと。さらに秀平は、無農薬にはどうしても自信が持てず、減農薬米を再度提案した。

秀平は不安が解けなかったのだ。はたして無農薬で収穫が可能なのか？ 稲がイモチ病や、ウンカでやられると収穫ゼロになることだってあるのだ。だからそんなリスクを避けて、他の農家が行っている減農薬米でいいのではないか。「減農薬米」であれば、収穫がゼロになることはない。こちらだって損害は少ないし、商社だってそのほうがいいのではないか。

それに加えて、果たして消費者が、無農薬米を望んでいるのか？ 無農薬米は価格が高くなる。その差額を払ってまで購入する消費者がいるのか？ 秀平は疑問だったのだ。だから減農薬米で価格も程ほどにして売れば、消費者もそれほど抵抗はないのではないか、と思ったのだった。

しかし、商社員は無農薬米に固執した。「無農薬米」をセールスポイントにしたいと言った。稲が病害虫にやられたり異常気候で収穫が減った場合は、玄米で千ヘーベ当たり二百四十キログラムの収穫があるものと見て、これを補償の基準にすると言った。

栽培法については、一任するが、その経過は一週間ごとに会社に提出することを求めた。秀平は、籾米状態での取引については、農家が各自に「籾すり」をして玄米にするよりも、商社が一括して玄米にするほうが、効率がよいと提案したが、はじめは断られてしまった。会社としては極力負担を軽くするという意図が見えた。

しかしこの件については秀平も粘った。各農家から籾米を一括して回収し、精米したほうが農家としても負担が少ないし、会社にとつても有利なはずだと思っただからだ。彼は会社の上司に電話して指示を仰いだが、結局秀平の案に同意した。秀平は他にもいろいろ疑点・不満はあったが、これも時代の流れだと、しぶしぶ彼の申し出に応じた。彼はほっとした表情で言った。

「将来は会社で農業を経営する計画なんです。やはり自分たちの思いどおりの米を作りたいですからね」

秀平は頷いた。

「じゃあ今はテスト段階なんですね」

「そうです。儲けは必要ないんですよ。二年間は不作でも完全に補償させていただきます」

秀平の田んぼ五反のうちほぼ四反が山間の谷にあった。収

穫は千ヘーベ当たり籾に換算して五俵（三百キログラム）程度だった。平野部では普通七俵から八俵取れた。

谷あいの田んぼの上には茶畑がある。この茶畑は良平が開墾して植栽したのだ。その茶畑の上には墓地が広がっていた。かなり大きな墓地で、東京に本店を持つ不動産会社が経営していた。

墓地の造成のとき、近くの数部落は反対した。当然彼もその反対運動に加わった。しかし市の担当者は、市街化調整区域にも指定されていない山林だから、土地造成の申請があれば申請書類に不備がない限り法律上不許可にすることはできないと言った。

結局条件闘争以外に方法はないことが分かり、市が関係地区と不動産会社との仲介に立つという条件で造成は認可された。

不動産会社と関係部落との取り決めの要点は、「環境保全を図ること。もし近隣の地区A、B、C、D部落の環境に害を及ぼしたときは適切な改善及び損害を補償する」というものだった。

地権者の中に大学の法科を出たという中年男性がいて、「補償では弱い。賠償にすべきだ。そうして細則を起こして、もっと賠償内容を具体化すべきだ」という意見を出したが、

地権者側から妥協する声が相次ぎ、そのまま「補償」で落着いた。地権者側からは、他の事項でもいろいろ具体化を要望したが、途中で地権者側に意見の相違が生じ、ほぼ会社側の意向通りに決着した。

短時間で合意に達したのは、墓地公園運営会社の涉外担当者である営業課長の手腕によるところが大きかった。徹底して腰が低く、説明が丁寧だった。地権者が強硬に主張や要求をしても、簡単に妥協はしなかった。しかし終始、誠実に対応した。地権者は田舎育ちで素朴である。この担当者のように誠意を前面に出されると、それが職業上のものでしかないとわかっていても、やはり攻撃は鈍ってしまうのだ。結果として後に禍根を残すことが多い。

結局、地権者が会社側の案に妥協する形で妥結した。墓地公園であることからゴルフ場のような環境破損はないと見ての妥協だった。さらに不動産会社は、秀平の谷あい田んぼのすぐ上まで買収に応じるように再三要請してきた。しかし彼は認めなかった。

墓地の周囲には芝生がたくさん植えられていた。除草や害虫駆除には除草剤や殺虫剤を使うはずだ。そうすると除草剤や殺虫剤の有毒成分が田んぼに流れ込むのは明らかだった。彼はこの点を配慮したのだった。茶畑でワンクッション置けば、除草剤や殺虫剤の被害も防げると思ったのだ。

農薬の被害は日本各地で発生しているが、その因果関係は査として判らない場合が多い。被害者の農家が、加害者である会社を相手に訴訟を起こした場合でも、因果関係がはっきりとしないことで、敗訴になる例も多い。敗訴すると訴訟負担が重くのしかかった。農家は低所得層が多い。だから、訴訟に持つていく前に敗者となる場合がほとんどだった。彼はそういうことも勘案して、田んぼのすぐ上の山地を開墾して

茶畑にしたのだった。

二.

秀平は庭に面した座敷廊下に座ると、昼のひと時を過ごしていた。猫のヒロがまとわりついてきた。彼は猫の顎をなでてやった。猫はぐるつと寝返ると仰向けになって体を彼にゆだねた。このネコは山道に捨てられていた。藪の中で母親を捜し求めて泣いていた。その鳴き声に見過ごすことができずに拾ってきたのだった。

猫は単独行動をとるといわれるが、意外とこのヒロは人懐っこく誰にでも擦り寄って行つた。オス猫なので妻も飼うことをしづしづ承知した。

妻はネコが嫌いで拾ってきたときはいやな顔をした。しかし娘の千尋が気に入ったので仕方なく飼うことを認めたのだった。一緒に暮らしてみると、意外に可愛くこの頃は妻もヒロを可愛がっていた。放し飼いで手が要らないことも妻にはありがたかったようだ。

妻の和子は都会育ちで、マンションでネコを買っている家庭を知っていた。そこを尋ねると必ず糞のにおいがしたと言った。だから猫そのものに嫌悪感を持っていた。

放し飼いでネコは外で糞をする。餌だけやっていけばいいだけで、後には面倒なことにはなかった。さらにオスだということも気に入っていた。メス・ネコだと放し飼いで、発情期には近隣のオス・ネコが数匹必ずやって来るのだ。しかしオス・ネコであればメス・ネコを求めて彷徨することはあ

つても、家の周囲にネコがやってくることはない。

「淳二がお盆に来るそうだ」

「あら、返事が来たの？」

「うん、お父さんの墓参りに一緒に行きたいと言っている」

「あら、あの人がよく許したわね」

あの人とは彼の実母のことである。妻は彼の母のことを何と言つていいかはじめは戸惑つていたが、今はあの人になつていた。

「恐らく本人が行きたいつて言つたんじゃないかな」

「そうでしょうね。それをあの人が仕方なく認めただんでしょうね」「仕方なく」は余計な一言だと彼は思つたが黙つていた。

妻は彼の兄弟の話になると一歩引いたところに身を置く。

彼もそのことに關しては、これでいいと思つている。いちいち口を出されると困るのだ。以前はもつと深く話に入り込んでいたのだが、そのたびに秀平は作爲的に彼女にいやな表情をした。妻はその表情を理解してその後は避けるようになった。彼は思つたことだった。妻はそれほど頭は悪くないと。

三.

母が一番下の弟の淳二を連れて家を出たのは、富彦が十二歳のときだった。母は三人の子供たちも連れて行きたいと望んだが、父が反対した。母も父の意向にそれほど逆らうことはなかった。母親としての気持ちと言つただけではなかった

のか、ということだった。このことは、後になつて近所の人から聞いて知つた。

母の不倫相手の男性は子連れでも構わないと言つたらしいが、これは本人に直接聞いたことではないから本当かどうかは分からない。しかし彼は、母は本当に子供を連れて行きたかつたのだと思う。というより思いたかつた。母から捨てられたという思いがいつも心の中によどんでいたのだ。このよどみを除きたいという思いはひと時も絶えることがなかつた。

しかし常識的に考へて、他人の子供まで引き取つて、恋人と一緒にすることはよほどの決断が要るはずだ。しかも他人の子供三人なのだ。父親として果たして責任を全うできるのか？ あるいは父親として愛情をもつて接することができるとか？ 母が去つたあと、彼は子供ながら疑問に思つたことだった。

父は、母との離婚については富彦たちには何も詳しいことは言わなかつた。一言「今後はお母さんとは別に暮らすことになる」と言つただけだった。彼にはそれが薄ぼんやりとわかつてもその伴う悲しみの表現ができなかつた。ただ、いぶかしげに、というより無表情に頷いただけだった。

母がいなくなるときびしい。そんなことは理解できたが表現の方法を知らなかつた。母がいなくなると自分の環境はどうなるのが想像できなかつたのだ。

その頃は父と母の諍いで家の中は暗かつた。泣きたいほどだった。ときどき夜に父と母の話し声が聞こえた。険悪な関係であることは、もれ来る話し声はよく聞こえなかつたが、

雰囲気で子供の彼にも分かった。二つ年下の妹も父と母のいざござはよく理解できなかったはずだ。たまたま昼間、父と母が話しているところに彼が行こうとすると、妹が雰囲気を察して彼の手を引っ張って行かせまいとしたことがある。

父は母が家を去った後一週間ほどして彼の妹を自室に呼んで、「お母さんはもう戻ってこない」と言った。そうして

「弟の淳二はお母さんと一緒に暮らすことになっている」

妹はそのとき悲しげな表情を見せた。彼も何も事情が飲み込めなくてただ聞いただけだった。そんなことよりも母がいないことのほうが悲しかった。

祖父も悲しい思いで二人を見つめるだけだったようだ。特に祖父は夫婦間のことだ。とかく他人が干渉すべきことではないという立場で見ていたようである。

彼が中学に入ると祖母はときどき母のことを話してくれた。それでもあまり孫に負担がかからないようにとの配慮もしていたようだ。詳しいことはほとんど話すことはなかった。

彼は虫見板と拡大鏡を持って家を出た。もうそろそろトビイロウンカがやってくるはずだ。トビイロウンカは中国大陸から風に乗ってやってくるのである。その数が少なければそれほどの被害はない。だから農業散布は必要がない。

田んぼは四反ほど、畑は二反ほどで、とても農業だけでは生活はできない。

彼は弟からの手紙を畳の間に置くと庭にある水道で足を洗った。稲も順調に育っている。今年の水不足もないようだ。明日は除草を考えていた。

四。

晴美は兄から、「淳二が盆に父の墓参りに来る」という連絡を受けたとき、すぐに母のことが思い浮かんた。しかし、今までは違つて母へ対する憎しみが薄くなっているのが分かった。「母はどんな暮らしをしているのだろう」そんな思いがした。一瞬、晴美は不思議に思った。しかしその疑念はすぐに消えた。「私は今母と同じ生き方をしている。だから母の過去の行状が理解できて、憎しみが薄れていつているのだ」と思うと晴美は自分で領いた。

春に母が淳二を連れて家を去ったとき、幼稚園に行つていた。父と母のいさかいは半年ほど続いていたから晴美もうすうす不安を感じていた。でも幼稚園児ではほとんど何も理解できなかった。母が家を出て行くとき晴美は母にすがつて泣いた。「おかあちゃん行かないで、私も連れて行つて」。母も泣いていた。しかし父は晴美を抱き上げると言つた。

「これからはお父ちゃんとお兄ちゃんとおばあちゃんたちと暮らすんだ。お母さんはときどきお前に会いに来てくれるから心配しないでいいんだよ」

父は頼ずりをしながら晴美に訴えた。

「晴美、お母さんが時々来るから心配しないで。あなたのことを忘れることはないよ。いいこと？」母は涙目で晴美に語りかけた。祖母が晴美の手を握つて言つた。

「おばあちゃんもいるんだよ」

母は弟の手を引いてタクシーに乗り込んだ。弟も泣きじゃ

くつていた。三歳の弟も異様な雰囲気を感じて泣いたのだ。晴美はその後、祖母の手で育てられた。

父は一年ほどして再婚した。新しい母には初めはあまりなじめなかった。継母は悪い人ではなかったが、子供扱いには経験がなかった。継母は悪手だった。しかし、彼女が晴美の母親になろうと努力していたことは理解できた。買物にもよく連れて行ってくれた。その点晴美は恵まれていたといっ
ていい。しかし実の母親ほどの親近さは感じなかった。それは仕方ないことだったのかもしれない。

何年過ぎても実の母との距離にはなれない運命であったといえはいいのだろうか。晴美にとつては血のつながりの不思議さが年を取るに従ってひしひしと感じられた。しかし継母との距離が少しずつではあるが接近していくのを感じ取っていた。

継母も嫁いで来たときよりは、自分を隠し立てすることが少なくなっていた。晴美が継母の纏った衣服を必死で剥ぎ取っていたのかもしれない。しかし晴美としてはそういう意図はあつたとしても、意識するまでには至っていない。あるいは義母が自らを曝していったのか？

継母は、生地は鹿児島で、F市の大学に入学、卒業しても実家には戻ることなくF市で職を見つけて働いていた。継母は母子家庭だった。だから大学でも苦学生だった。大学の講義が終わるとスナックに勤めた。このアルバイトは二年先輩からのお譲りだった。これは継母から直接に聞いたことだ。それ以上の事はほとんど知らなかった。でもおいおいわかっ

てくるのだろうと思つた。

周囲からときどき継母の過去が伝わってきたが、その真偽は分からない。晴美が聞くべきことでもなかったし、晴美もそれほど関心はなかった。

晴美は大学を出ると地元の製菓会社に就職した。晴美のともとの希望する会社ではなかった。採用試験は四年から受けた。友人の中には三年の終わりに内定を貰ったものもいたから晴美の場合、就職試験そのものが遅れたのだ。故意に遅らせたのではなかった。希望する会社がなかったのだ。

製菓会社と言つても従業員三十名程度の地元の銘菓を製造している会社で、面接は社長自ら試験管だった。

兄もよく遊んでくれたが、兄とは年も二つしか違わず、甘えることはほとんどできなかった。兄は遊びからの帰りには必ず手を繋いでくれ、歌も歌ってくれた。しかし母のいない空間を埋めてくれる存在ではなかった。兄の優しさが理解できようになるまでにはいくらかの月日を要した。

晴美はいつも母のことを思つた。母が淳二だけを連れて去つたことが心の傷としていつまでも残つて消えなかった。

「なぜ私も連れて行かなかつたのか」そんな思いが消えることがなかったのだ。

ときどき継母が、母が家を去つた理由を教えてはくれたが、それほど深くは説明してはくれなかつたし、仮に父と母の心情を継母が晴美に解説してくれたとしても幼い彼女には理解できなかつたに違いない。

小学校に行く頃になると母の面影も薄れた。その間隙を継

母が補ってくれた。その頃になると晴美と継母の関係もスムーズにいくようになっていた。お互いが利口になったのだ。

継母も子ども扱いになれて親としての接し方に自信が持てるようになっていった。また晴美は他に頼るべきものはいないので自然と継母になつていった。「お母さん」と呼んでもなんら違和感がなくなつたのだ。

だから晴美の小学時代は実母がいけないことは不幸であつたが、それを継母が相当部分補つてくれた。また祖母も傍からいろいろと気を使つてくれたからそれなりに恵まれた少女時代だつたということが出来る。

晴美は時計を見た。四時を過ぎている。そろそろ夕飯の支度をしなければと思う。しかしそれほど乗り気にはなれない。夕べ夫といさかひをした残り火がまだ消えていなかったのだ。理由は夫が不妊治療を受けないことであつた。晴美は子供がほしかった。結婚して一年過ぎても妊娠の兆候が全くなかつた。晴美は夫に言つた。そろそろ春の気配が感じられる二月の中旬だつた。

「子供ができないつて変じゃない？」

「まだ一年しか経っていないじゃないか。あせることはないよ」

夫はこともなげに言つた。確かにそれはそうだつた。一年の間に妊娠しない女性が多い。知人を見ても結婚して二年目に子供ができたという夫婦はそれほど多くはない。避妊している人もいるのだらうが、二、三年後に天の恵みで子供がで

きた人も多いことは事実だ。

でも晴美は不安だつた。彼女は夫に何かしら物足りないという思いがあつた。子供をほしがらないこともその一つだが、他にも不安があつた。それは一人取り残された孤独感、それは誰にも説明できない不安な感情だつた。晴美はこの不安な感情が、母のいなかった生活と関係があるのではないのか？という思いがしていた。その理由は分からない。祖母が目に入れても痛くないように育んでくれたことには感謝している。しかし何が足りなかつた。この感情は母のいない家庭の子どもはすべて経験しているはずだ。何も周囲を見ればありふれたものなのだ。

しかしそう思つてもこの孤独感は消え去らなかつた。ふと晴美は離婚を考えた。晴美は突然身をぶるつと震わせた。いやそんなことは考えるべきではないんだ。自分も望んで一緒になつた彼女のだ。

彼とは大学時代のサークル活動での出会いだつた。晴美が入学したとき彼はもう社会人だつた。

(未完)